長野大学紀要　第24巻第1号　1－7頁　2002

グレアム・グリーンの*The Heart of the Matter*の初稿

The Autograph Manuscript of Graham Greene's *The Heart of the Matter*

岩　崎　正　也*
Masaya Iwasaki

グリーンは、緑色のラシャ張りのドアによって象徴される「国境」を挟む二種類の世界の対立をテーマにして、人間の生と死との係わりを描いてきた。それとともにテーマの意図を実現するために、技法の問題に苦心してきたことを私たちは見逃すことはできない。この点についてグリーンは、「注目に値する作家はだれにしても、自分に処理できないと気がつくもの（筆者注：時間の処理）に初めて出合う瞬間があるものだ。そのとき作者は真価をためされ、その独自の技法が進展する」[1]と述べている。作家としてのグリーンの生涯を技法の点から二分すると、前半は三人称による視点描写の完成をめざした*The Heart of the Matter*（1948）を含む1940年代の終りまでの期間であり、後半は50年代の*The Third Man*（1950）の一人称による語り口に始まり、80年代の寓話による方法へ移行した期間である。その意味で、*The Heart of the Matter*は三人称語りから一人称語りへの移行の分岐点にある作品と考えることができる。

A List of Graham Greene's Works

Stories＝*The Basement Room and Other Stories*（1935），*Nineteen Stories*（1947），*Twenty-One Stories*（1954）
Sense＝*A Sense of Reality*（1963），Enlarged Edition（1972）
May＝*May We Borrow Your Husband? and Other Comedies of Sexual Life*（1967）
Last＝*The Last Word and Other Stories*（1990）
①は一人称語り

1923　'The New House'（Last）
1925　*Babbling April*
1929　'The End of the Party'（Stories）
　①'The Second Death'（Stories）
　'Murder for the Wrong Reason'（Last）
　The Man Within
1930　'I Spy'（Stories）
　'Proof Positive'（Stories）
　The Name of Action
1931　*Rumour at Nightfall*
1932　*Stamboul Train*
1934　*It's a Battlefield*
1935　①'A Day Saved'（Stories）
　England Made Me
　The Bear Fell Free
　'The Basement Room'（Stories）
　'Jubilee'（Stories）
　'Brother'（Stories）
　'A Chance for Mr. Lever'（Stories）
1936　'The Other Side of the Border'（Stories）
　A Gun for Sale
　Journey Without Maps
1937　①'The Innocent'（Stories）

*教授

'A Drive in the Country' (Stories)
1938 'The Lottery Ticket' (Stories)
① 'Across the Bridge' (Stories)
Brighton Rock
1939 'A Little Place off the Edgware Road' (Stories)
① 'The Case for the Defence' (Stories)
The Lawless Roads
The Confidential Agent
1940 'The Lieutenant Died Last' (Last)
'The News in English' (Last)
1940 'Men at Work' (Stories)
① 'Alas, Poor Maling' (Stories)
The Power and the Glory
1941 'When Geek Meets Greek' (Stories)
1942 *British Dramatists*
1943 *The Ministry of Fear*
1946 *The Little Train*
1948 *Why Do I Write?*
① 'The Hint of an Explanation' (Stories)
The Heart of the Matter
1950 *The Little Fire Engine*
① *The Third Man*
1951 *The Lost Childhood and Other Essays*
① *The End of the Affair*
1952 *The Little Horse Bus*
1953 *The Living Room*
Essais Catholiques
Nino Caffè
The Little Steam Roller
1954 'The Blue Film' (Stories)
'Special Duties' (Stories)
'The Destructors' (Stories)
1955 'Work Not in Progress' (Last)
① *Loser Takes All*
① *The Quiet American*
1956 ① 'The Man Who Stole the Eiffel Tower' (Last)
1957 *The Potting Shed*
① 'A Visit to Morin' (Sense)
1958 *Our Man in Havana*
1959 *The Complaisant Lover*
1961 *In Search of a Character: Two African Journals*
A Burnt-Out Case
1962 *Introductions to Three Novels*
1963 'Under the Garden' (Sense)
'Dream of a Strange Land' (Sense)
'A Discovery in the Woods' (Sense)
1964 *Carving a Statue*
1966 ① *The Comedians*
1967 ① 'May We Borrow Your Husband?' (May)
① 'Beauty' (May)
① 'Chagrin in Three Parts' (May)
'The Over-night Bag' (May)
'Mortmain' (May)
1967 'Cheap in August' (May)
'A Shocking Accident' (May)
① 'The Invisible Japanese Gentlemen' (May)
① 'Awful When You Think of It' (May)
① 'Doctor Crombie' (May)
① 'The Root of All Evil' (May)
① 'Two Gentle People' (May)
1969 *Collected Essays*
① *Travels with my Aunt*
1971 *A Sort of Life*
1972 'The Blessing' (Sense)
'Church Militant' (Sense)
'Dear Dr. Falkenheim' (Sense)
The Pleasure Dome
1973 *The Honorary Consul*
1974 *Lord Rochester's Monkey*
1975 *The Return of A. J. Raffles*
1978 *The Human Factor*
1980 *Ways of Escape*
① *Doctor Fischer of Geneva or The Bomb Party*
1981 *The Great Jowett*
1982 'An Appointment with the General' (*Last*)
J'Accuse
Monsignor Quixote
1983 *Yes and No* and *For Whom the Bell Chimes?*
The Other Man: Conversations with Graham Greene

1984　*Getting to Know the General*
1985　*The Tenth Man*
1988　'The Last Word' (Last)
　　'The Moment of Truth' (Last)
　① *The Captain and the Enemy*
1989 ① 'An Old Man's Memory' (Last)
　　Yours etc.
　　Dear David, Dear Graham
1990　*Reflections*
　① 'A Branch of the Service' (Last)
1992　*A World of My Own*
1993　*The Graham Greene Film Reader: Mornings in the Dark*

グリーンはこの原稿執筆の苦労を、71年にハイネマンとボドリーヘッド両社が共同出版した全集版の序文で次のように記している。「これまで場面から場面への転換をどうしていただろうか。どのようにして物語の視点を一つに、あるいはせいぜい二つに限定しただろうか。そういう技法上の問題が一ダースも私を苦しめてきた。解決策がいつも容易に現れてきた戦前にはまったく起らなかったことだ」[2]。またテクスト改訂についても、「小さな改訂はおそらくこの全集の他のどの小説よりもはるかに多く行われている」[3] と打ち明けている。

さらにディヴィッド・ヒグドンは、60年ニューヨークで出版されたヴァイキング・コンパス版と、74年にやはりニューヨークで出されたヴァイキング・コンパス版のテクストとを比較検討し、「*The Heart of the Matter* ほど改訂に注意を払って書かれた小説作品は他にない」[4] と前置きした上で、付加が23、削除が131、書替えが158か所にのぼると指摘する。

1962年、スエーデンのストックホルムの出版社から出された *Introductions to Three Novels* という小冊子の中でグリーンは、「またもここに技法上の欠陥があった。その原因の一部は私が創作活動をあきらめなければならなかった5年という歳月によるものだ」[5] と語る。

年代順の著作リストを見ると、*The Heart of the Matter* の出版は48年だから、その5年前に出された小説作品は、43年の *The Ministry of Fear* である。この5年間に書かれたのは、*The Little Train* という童話と、*Why Do I Write?* の中の二通の書簡と、"The Hint of an Explanation" という短篇だけなので、この5年は創作活動のほぼ空白期間にあたる。

全集版の序文でグリーンは、この作品は心理的な欠陥よりも、技法上の欠陥があることを認めた上で、ペン書きの初稿から削除した、ウィルスンとスコウビー夫人との＜散歩のエピソード＞を初めて全集版に復活させた、と制作意図の一端を読者に洩らしている。

筆者が先年ジョージタウン大学で調査した、グリーンによるペン書きの初稿は、縦32センチ7ミリ、横20センチ1ミリ、罫線が33本ある用紙に青インクで書かれている[6]。枚数は175枚、用紙の上部に算用数字でページ数がつけてあるので、全部で175ページあることになる。

原稿を調べていくうちに、作者が序文や他のどの文章の中でも触れていないもう一つの意図が隠されていることがわかった。全集版の、ウィルスンとルイーズとの＜散歩のエピソード＞の直前に、ウィルスンとハリスの二人が＜ゴキブリ取り競争＞をする一節がある。ところがこのエピソードの3ページ分は一連の算用数字によるページがつけられていず、A1、A2、A3という別のページがついていて、＜散歩のエピソード＞と差し替えるために、タリット家の晩餐のエピソードのあとに、「A稿を入れる」("Take in A Copy") というメモが記されている。つまりグリーンは＜散歩のエピソード＞は削除したと記しているが、代りに＜ゴキブリ取り競争＞の一節を挿入したことには触れていない。その意図は何か。この入れ替えの必然性は技法の点からすると、基本的には語りと視点の問題に尽きると筆者は思う。

全集版第一巻第一部は一、二章ともに、ほぼ全編がスコウビーの視点から語られる。ところが第二部はスコウビーからウィルスンに視点が切り替えられ、事件はウィルスンの視線をとおして伝えられている。初稿から削除された＜散歩のエピソード＞と差し替えられたA稿の＜ゴキブリ取り競争＞を含む第一巻第二部にある他の4つの節の配列を初稿、初版、ユニフォーム・エディショ

ン、全集版の4種について調べると、次のようになる。

＜散歩のエピソード＞は初版とユニフォーム・エディションでの、第一巻第二部第一章第三節と第二章の間に挿入されたことになり、全集版では＜散歩のエピソード＞と＜スコウビーの出発＞の場面をそれぞれ第二章の一節と二節とに配列し直している。

Book One, Part Two				
	初　稿	初　版	Uniform Edition	全　集　版
インド人による占い	Ⅰ	Chapter Ⅰ　1	Chapter Ⅰ　1	［1］i
タリット家の晩餐	Ⅱ	2	2	ii
ゴキブリ取り競争	A1～A3	3	3	iii
散歩のエピソード	Ⅲ	なし	なし	［2］i
スコービーの出発	Ⅳ	Chapter Ⅱ	Chapter Ⅱ	ii

グリーンは＜散歩のエピソード＞を全集版に復活させた理由を次のように言う。「この小説の最初の原稿の中では、ヒル・ステーションの下を走る廃棄された線路沿いを、夕方になって散歩するスコウビー夫人とウィルスンの間で一場が演じられていた。第二部第一章の終りと第二部第二章の始めの間である。これはスコウビー夫人の性格をもっと好意的な立場から見たものだ。しかしその場面はウィルスンの目をとおして描かれなければならなかった」。そのためにはこの場面に先立つ＜ゴキブリ取り競争＞の中で、ウィルスンの性格描写を推し進め、同時に視点の設定をウィルスンの内面に切り替えなければならない。それを示す、A2稿から削除された3つの文章(1)(2)(3)を取り上げてみたい。

(1)　It was like quarreling with one's own image in the glass. "I was crazy," he thought. "What made me fly out like that? I've lost a friend~~, and the sense of justice he always carried in his heart made him admit, "After all he had a right to make the rules.~~"

(1)の削除部分はウィルスンの性格を発展させている。the sense of justiceが港町で警察副署長を務めるスコウビーについて形容される、Scobie the Justと強く共鳴しているからである。

(2)　That night it took him a long while to sleep, and when he slept at last he dreamed that he had committed a ~~murder~~ crime, so that he woke with the sense of guilt still heavy upon him. ~~He had slain a man who was sometimes Harris and sometimes Scobie, and he was pursued by a Syrian policeman who looked like Tallit and was called Yussuf. But pursued was the wrong word, for did he not passionately long to be taken? did he not make every effort~~ ~~When~~ ~~As he was~~ on his way down to breakfast he paused outside Harris's door. There was no sound.

(2)の文章で語り手は、「ウィルスンは殺人を犯した夢を見た」と言ったあとで、明らかにウィルスンの内面に視点を据えてその意識を語る。ウィルスンがタリットとも、ユーゼフとも取れるシリ

ア人警官に追われた、という描写はスコウビーの　意識にも当てはまることを暗示している。

(3)　~~He felt acquitted: if one was not condemned, one could not then be a criminal. It was like a reward of for virtue triumphant when he found beside his plate a note from Mrs Scobie—"if you feel like a walk and a drink . . . ." It seemed to him then that anything was possible, and this was still a happy thought.~~

(3)の文章も(2)と同様に、ウィルスンの内面描写を行うことによって、このエピソードをはっきりとウィルスンの視点から語ろうとした意図を知ることができる。

しかしウィルスンの内面を描写することは、それまで維持してきたスコウビーの視点描写の一貫性に破綻を生じさせる。少なくとも作者は、ここでこの場面を持ちだすのはスコウビーの視点を崩してしまう点で時期尚早だと思ったと言う。したがって作者はウィルスンの内面からの視点描写を避けるために、少なくともこの3つの文章を削除しないわけにはいかなかった。けれどもこの3か所を除くテクストの大部分は登場人物の性格描写を阻害するよりは、むしろプロットの進展を促していると判断して、＜ゴキブリ取り競争＞を残すことに決めたと考えることができないだろうか。

注

1）Graham Greene, *Collected Essays* (London: Bodley Head, 1969), p. 69.

2）Graham Greene, *The Heart of the Matter* (1948; London: Bodley Head, 1971), xii.

3）Ibid., xiv.

4）David Leon Higdon, "Graham Greene's Second Thoughts: The Text of *The Heart of the Matter*", *Studies in Bibliography*, 30 (The University Press of Virginia, 1977), p. 250.

5）Graham Greene, *Introductions to Three Novels* (Stockholm:Norstedts, 1962), p. 26.

6）用紙の調査は、1998年ハワード・ユニヴァーシティ研究員としてワシントンＤＣに滞在した日本大学助教授木内徹氏の好意によるものである。

岩崎正也教授　略歴および主要著作

略　　歴

氏　　名　岩崎正也（いわさき　まさや）
生年月日　1937年1月28日生
本　　籍　新潟県上越市
住　　所　〒943-0831　新潟県上越市仲町5－5－2

(1) 学　　歴

1960年3月　早稲田大学第一文学部文学科英文学専修卒業
1962年3月　早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了（文学修士）
1963年3月　早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻特殊学生修了

(2) 職　　歴

1960年4月　東京都東村山町立第一中学校非常勤講師
1961年9月　東京都立川市立第一中学校非常勤講師
1963年4月　東京都・私立成女高等学校教諭
1965年4月　新潟県立高田高等学校教諭
1971年4月　新潟県立小千谷高等学校教諭
1975年4月　新潟県立見附高等学校教諭
1979年4月　新潟県立高田高等学校教諭
1986年4月　新潟県立柏崎高等学校教諭
1987年4月　長野大学産業社会学部教授
1988年4月　信州大学教養部非常勤講師（～1992年3月）
1994年8月　ジョージタウン大学大学院英文科（アメリカ・ワシントンＤＣ）研究員（～1995年3月）
1995年4月　早稲田大学法学部非常勤講師
2002年3月　長野大学定年退職

主　要　著　作

Ⅰ　論文

① 「『内なる人』―グレアム・グリーンの「喪失」と「成熟」―」早稲田大学英文学会『英文学』第46号　1977年3月（単著）
② 「グレアム・グリーンの『庭の下』について」（『フェニックスを求めて―英米小説のゆくえ―』）南雲堂　1982年6月（単著）
③ 「グリーンの創作方法」（『英語青年』1991年9月号）研究社　1991年9月（単著）
④ 「清水邦夫の『火のようにさみしい姉がいて』論」『長野大学紀要』第17巻第4号　1996年3月（単著）
⑤ 「グレアム・グリーン―その生と死―」（『グローバル時代の地域と文化』）郷土出版社　1999年6

月（単著）

⑥ 「グレアム・グリーンの原風景―<緑色のラシャ張りのドア>の現実と虚構―」『長野大学紀要』第23巻第4号　2002年3月（単著）